

サイドステップテストと指導者評価との関係

研究代表者 亀田麻依 (鹿屋体育大学)
メンバー 木葉一総、前田明 (鹿屋体育大学)

目的

本研究は、ディフェンス場面におけるサイドステップテストと指導者の評価との関係性を明らかにすることを目的とした。

方法

対象者は、大学女子バスケットボール選手 12 名とした。本研究では、右方向へサイドステップを行い、3 m 地点に設置されたモニタに表示される矢印の方向に従って、直進か切り返しかを判断する方法を用いた。すなわち、右方向の矢印が表示された場合には、3 m を通過するまで右方向へのサイドステップを続けた。一方、左方向の矢印が表示された場合には、3 m 地点で切り返し動作を行い、左方向へサイドステップで 3 m 戻った。移動方向を示す矢印は、スタートから 2.5 m 地点に設置した光電管を先行足が通過するタイミングで呈示した¹⁾。サイドステップ動作は、光学式 3 次元動作解析システムにて撮影し、切り返し足の床反力は、フォースプレートにて取得した。条件は、呈示する矢印の方向を予め対象者に通知する予測可能条件 (PRE) および通知しない予測不可能条件 (UN) とした。サイドステップテストから、1) サイドステップ、2) 反応、3) 予測と判断、4) 切り返し、5) 総合的なディフェンスの 5 項目をディフェンスの評価として算出し、偏差値化した。一方、指導者 (監督歴 41 年、コーチ歴 3 年) は、Visual Analog Scale を用いて上記の 5 項目の主観的評価を行った。サイドステップテストにおける実測値と 2 人の主観的評価を合計し、偏差値化した値との相関係数を求めた。

結果および考察

PRE では、サイドステップ ($r=.70$)、切り返し ($r=.55$) において、指導者の評価と高い相関関係がみられた。一方、UN では、サイドステップ ($r=.36$) において、中程度の相関関係がみられたが、他の項目の効果量は小さかった。しかしながら、UN における、切り返しに関しては、指導者の評価が特に高かった一部の選手を除くと、 $r=.86$ であった (図 1)。つまり、一部の選手においては、本研究のサイドステップテストでは測ることのできない能力を有している可能性が考えられる。Lee ら²⁾ は、矢印課題 (UN) よりも映像課題の方が、競技レベルが高い選手の能力を示す

ことができると報告している。本研究における、特に評価が高い選手は、競技特有の予測のための情報収集能力、すなわち、オフェンス選手の情報を読み取る能力が優れていた可能性が考えられるが、本研究の矢印課題ではその能力を活かすことができなかったと推察される。以上より、サイドステップテスト (UN) は、指導者の評価を概ね反映することが示されたが、特に評価の高い選手を測定する際には、留意する必要があると考えられる。

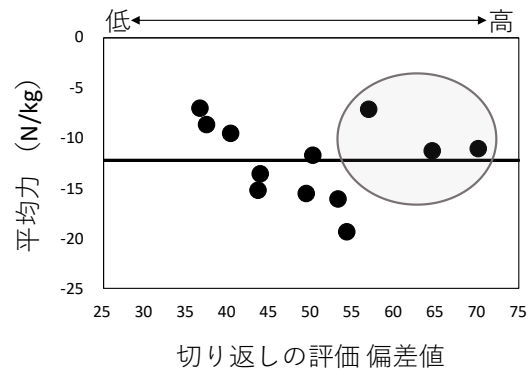


図 1 : UN における切り返し時の平均力と指導者の切り返し評価との相関関係

まとめ

本研究は、2 種類のサイドステップテストと指導者評価との関係性を明らかにすることを目的とした。PRE におけるサイドステップテストは、サイドステップスピードおよび切り返しを評価することが可能であることが示された。また、UN におけるサイドステップテストは、切り返しを評価することが可能であることが示されたが、特に評価の高い選手に関しては、その能力を反映しきれない可能性もあるため留意する必要がある。

参考文献

- 1) 亀田麻依, 木葉一総, 前田明, 判断を伴うことによるサイドステップ動作の変容, バスケットボール研究, 4, 13-26, 2018.
- 2) Lee MJ., Lloyd DG., Lay BS., Bourke PD., Alderson JA., Different visual stimuli affect body reorientation strategies during sidestepping, Scand J Med Sci Sports, 27(5), 492-500, 2017.